Record of Boston life

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37767

【留学報告】

ボストン滞在記

Record of Boston life

金沢大学医薬保健研究域医学系経血管診療学
（放射線科）
龍　泰　治

わたくしは2012年6月から2013年8月までの間，アメリカのマサチューセッツ総合病院放射線科へ研修にいく機会を与えていただきました．早いもので日本に帰国して半年になります．ここに今回の経験をまとめてみたいと思います．

◆渡米にいたる経緯

わたくしは1997年に金沢大学を卒業し，金沢大学附属病院および金沢大学放射線科の関連病院で研修後，2007年に大学に帰学しました．帰学後，松井教授(当時)より大腸3次元CT (CT colonography: CTC) について，その実態について調査をするように指示を受けました．世界に目を向けてみると，2008年はAmerican College of Radiology Imaging Network (ACRIN) が，NEJMに「10mm以上病変についての検出能はCTCと内視鏡は同等である」というCTCにとって歴史的な論文を発表した年にあたります．当時の日本の状況は「国立がんセンターで大腸癌術前の注腸検査をすべてCTCに切り替えた」という話が漏れ聞こえてきた頃で，CTCを実際にやっている施設は限られていました．金沢大学放射線科としてもCTCの動向は気になっていました．ちょうどその頃に日本の多施設が参加した「CTCの読影精度に関する大規模多施設共同臨床研究－JApanese National CTC trial: JANCT」がスタートしました．わたくしはCTCについて全くの素人ながら，同研究へのオブザーバー参加を経て，読影者として共同研究に加えていただくことができました．このJANCTを主導していたのがマサチューセッツ総合病院(MGH)の吉田広行先生，永田浩一先生(現 亀田京橋クリニック)であり，この研究へ参加したことが縁となりMGHへの研修の話がもちあがり，ありがたくいかせてもらうことになりました．吉田先生はシカゴ大学在籍時に当科同門の小林健先生と一緒に仕事をした縁があり，以後金沢大学と仲良くさせていただいている背景もあります．

◆ビザの取得

アメリカは911テロの影響でビザの取得が厳しくなっています．履歴書作成，推薦文作成(松井教授，第一生理学多久和教授のご厚意)，犯罪をおかしていないこと宣誓する文書，Notaryつきの文書(Notaryとはサインが本人のものであるということをNotary資格者が認証するものでアメリカでは一般的です．金沢で用意することは簡単ではなく，大使館まで出向きました.)などに結構な時間がかかりました．結局，研修を希望してからビザ取得の必須書類であるDS-2019の取得までに半年くらいの時間がかかり，ビザが下りるまでの期間は非常にストレスがかかりました．ビザ面接そのものは拍子抜けするくらいに簡単なものでしたが．

◆研究の紹介

欧米では先に紹介したNEJM論文だけではなく，CTCの有用性を証明した論文が複数発表されておりCTCが役に立つことはすでにコンセンサスが得られています．世界中のCTC研究者は ①診断の難しい平坦病変の検出能向上 ②CT被ばくを減らすための低線量撮像 ③前処置の軽減(下剤を使用しないことで患者の検査受容度を上げる)というテーマに現在注目しています．吉田研究室でもComputer-aided Detection (CADe)を用いて上記テーマに挑んでおり，わたくしは読影者としての参加と，研究計画の立案などで関わることができました．

◆現地の生活

ラボのメンバーは，中国人2名，韓国人1名，フィンランド人1名，日本人2名，アメリカ人1名の混成部隊でした．一週間に一度，2時間程度を使ってラボカンファをおこないますが，あとの時間は基本的には個人のペースで自分にあたえられたテーマにとり組んでいました．アメリカ人は残業をしないものと聞いており，実際に他のラボのアメリカ人は勤務時間が終わるとすぐに帰宅していましたが，わたくしが所属していたラボは上司が日本人ということもあり比較的遅くまで残って仕事をしていました．

アジア人ばかりのラボでしたが，同一フロアにほかのラボに所属する多数のアメリカ人がいてランチなどには頻繁に誘ってくれました．フレンドリーな人が多く，たいていの人とは会えば挨拶をする仲にはなり，早期から職場にはなじむことができました．

◆英語の勉強

英語では苦労しました．はじめはカンファランスなどで自分の意見を英語でいうことや，他人の発言を理解することは大変でした．そこで，せっかくアメリカにきたので一週間に一度は英語のプライベートレッスンにいっていました．Native speakerとマンツーマンのフリートークを1時間程度するのですが，これがよい息抜きになりました．英語の勉強ということもありますが，普段生活して疑問に思ったことや文化の違いなどを会話するのがとても楽しかったです．スーパーなどに買い物にいった場合にはできるだけ店員さんに話しかけて商品説明をしてもらって英語に慣れるように試みました．しばらくすると，少し英語に慣れてきて，というより単に度胸がついてきただけなのかもしれませんが，道を歩いているとアメリカ人に道をきかれることが多くなりなんとなく嬉しくなったものです．まだまだ英語が慣れたとはいいがたいですが，アメリカ人とあっても必要以上に委縮することはなくなっていると思います．

◆家族の生活

当初は，単身で渡米していましたが後日妻子が合流しました．子供の学校準備で予防接種や健康診断につきそったり，学校の先生と面談したりと何かと大変なこともありましたが，子供を介してのいろいろな催しに誘ってもらうことも多くなり，単身でいっていたら味わえない経験をしました．また，アパートが集合住宅になっており，共通のベースメントや庭で食事会をしたり，誕生会をしたりと異文化交流をすることができました．同じアパートには小さな子供をもつ家族がわたくしの家を含めて4家族(わたくしの家族以外はアメリカ人，ドイツ人，イギリス人)おり，この4家族でよく一緒に遊んでいました．

妻は社交的な性格ですが，英語があまり得意ではなく当初は戸惑っていましたが，現地の英語学校(市が提供する無料の教室)に通ったり，子供の学校の父兄会に参加したりして交流を図り充実した日々を過ごしていたようです．長男は6歳，次男は3歳で渡米しました．当初は学校へいくことを非常に嫌がりましたが，1月もすると楽しそうに通っていました．ボストンの小学校は無料でしたので経済的に助かりました．プレスクールは高額なので3歳の息子は週3回の通学としました．三男は1歳でしたので家にいました．彼はよく発熱したので，頻繁に病院にいきました．彼のおかげでアメリカの病院に受診する手続きには慣れました．(電話で事前予約をしないといけないので，英語での電話は苦手ですが勇気を振り絞って電話をしました.)

諸事情により渡米時と，帰国時の両方でわたくしは別行動になってしまったので，妻は息子3名を連れて日米を往復してくれました．その点は大変申し訳ないと思っています.それ以外にもいろいろな困難はありましたが，家族で一緒に過ごせたことは大変幸せなことだと思っています．

◆カルチャーショック

わたくしはアメリカ本土にいったことははじめてでしたので，非常に緊張して渡米しました．少しずつ現地の生活に慣れて昼間に人の多いところを歩くぶんにはそれほど危険がないことがわかってきました．ただ，渡米してすぐに自転車を盗まれたことはショックでしたし，新聞ではしばしば殺人事件が報道されているのでいつも気をつけて外出していました．ちょうど渡米中には小学校での銃乱射事件が隣の州で発生したり，ボストン爆破事件が発生したりして怖い思いもしました．

アパートの大家さんとのやりとりもカルチャーショックをうけました．わたくしの入居したアパートはこまごまとした不都合があったのですが，不都合を家主と直接交渉しないと解決しません．この家主との交渉がなかなかタフな交渉となりかなりのパワーを使いました．

カスタマーサービスに電話をするとたらいまわしになって，何も解決しない経験を何度かしておりこの点はアメリカの良くない点だと思っています．家賃を小切手で郵送する習慣やチップを渡す習慣も日本人からすると不合理にも思えました．

アメリカの習慣のよい点，悪い点が気になるのは一年じっくり住むことができたからともいえます．その意味では旅行では味わえない貴重な経験ができました．

◆よかった点

研究の面では，読影実験の基本的な手法を学ぶことができました．

CTCの研究で北米放射線学会へ演題が採択され，研究成果を発表できたことも得がたい経験です．

上司の吉田先生はアメリカで10年以上研究生活をしているので吉田先生からアメリカの厳しい予算獲得競争の生々しい現実をお聞きできたことも，勉強になりました．

◆最後に

外国にいって仕事をすることは戸惑うことも多いですが，大変な刺激になります．十全同窓会の先生方におかれましては，海外にいく機会を積極的に探されるとよいかと思います．現地であった日本の他大学出身の研究者で，メールで自分を売り込んで留学を果たしている人がいました．ネットでも情報があふれていますので(「研究留学ネット」など)積極的にそのような情報を利用するとよいと思います．

謝　　辞

素晴らしい機会を与えていただいた松井修前教授，蒲田敏文教授には深く感謝申し上げます．第一生理学教室の多久和陽教授には推薦文を書いていただいただけでなく，渡米前には貴重なアドバイスもいただきました．この研修は放射線科の諸先生のサポートがなければおこなうことができませんでした．ありがとうございました．

クリスマスツリーを切りに

食事会にて